



### 重度重複児のコミュニケーション

—インリアル・アプローチから—  
特別支援教育相談課 指導主事 吉原 勝

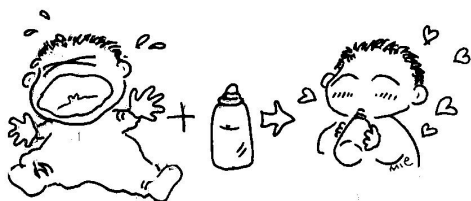
重度・重複障害児では、ことばによるコミュニケーションが難しい場合がほとんどです。からだを動かしたり、目で合図を送ったり、手足を差し出したり、といったボディランゲージや、時には「ウー」というような発声で訴えたりすることもあります。

このような重度・重複障害児の学習場面では、教師は目の前の児童生徒に対し、「コミュニケーションがとれない！！」等の評価をすることがあります。「ことば」がないということその根拠になっています。

けれども、本当に、「コミュニケーションがとれない。」と言えるのでしょうか？言い換えれば、コミュニケーションがとれない原因は、児童生徒の側にあるのでしょうか？

まず、赤ちゃんとお母さんとのやり取りのシーンを考えてみてください。

赤ちゃん：泣く  
 母親：どうしたの  
 赤ちゃん：泣きやまない  
 母親：おなかすいたの  
 【ミルクを与えると泣きやむ】  
 母親：おなかすいていたのね！



これは、「泣く」という行動が「おなかすいた」という意思表示である例です。

すなわち、子どもは言語を獲得してから初めてコミュニケーションについて学んでいるのではなく、やり取りを通じて既にコミュニケーションの方法やルールを学び始めている、ということです。

自分の要求や考えを「分かってもらえた」という満足感、「伝えたい」というコミュニケーションに対する意欲を育てることこそ、生きた言葉（非言語を含む）の獲得につながっていくものと思います。

その一つの方法としてインリアル・アプローチが有効と考えられます。

I インリアルなアプローチとは

インリアルは、1974年米国コロラド大学コミュニケーション学科のワイズ(Weiss,R.)博士とヒューブレン(Heublein,E.)によって言語発達遅滞幼児に対する言語指導の一つとして考えられました。

INREAL：Inter Reactive Learning and Communication（相互に反応しあうことで、学習とコミュニケーションを促進する）という意味があります。

言語指導では、正しい発音の誘導(音韻論)、カードによる語彙の獲得(意味論)、プリントによる文法の定着(統語論)などがあります。

例)

【先生がリンゴの絵カードを指さして】

教師：「Aさん これ何？」

Aさん：「ゴ」（リンゴを知っていてもことばとして表現することが難しい。）

教師：「今度は、ちゃんと言ってごらん」  
「り・ん・ご」

Aさん：「ゴ…」



重度の障害のある子どもは、ことばを日常のコミュニケーションとして機能させにくい面があります。そこで、「単語がいくつ話せるか」より「どのように伝えられるか」というコミュニケーション能力を伸ばしていこうという観点が必要になります。

先ほどの例では、

「ゴという音は、『リンゴ』の語尾である」としてとらえるのではなく「『リンゴがほしい』の意図の表現である」と認識することが重要になります。

【子どもの表現】→【状況・文脈で変わる意図】

母親にしがみつき「ワンワン」

→「イヌがこわいよ」

笑顔で犬を指さして「ワンワン」

→「イヌがいた」

時計を指さし「アーアー」

→「終わりだよ」

犬に向かって「ワンワン」

→「イヌさん、こんにちは」

おもちゃ箱を指さし「ワンワン」

→「イヌのおもちゃをとって」

このように、インリアルでは、大人が子どもの意図を的確に読み取ることで、子どもがコミュニケーションの成功体験を重ねることを大切にしています。

## Ⅱ 大人の基本姿勢

相手（子どもたち）から豊かなコミュニケーションを引き出していくために大人の側の基本姿勢はSOULの名で呼ばれています。

Silence（静かに見守ること）

Observation（よく観察すること）

Understanding（深く理解すること）

Listening（耳をかたむけること）

静かに見守りながら、しっかりと子どもを観察し、状態や要求を理解し、子どもが言っていること、言いたいと思っていること、伝えたいこと、を聞いてあげることになります。

## Ⅲ 言語心理学におけるアプローチ

普段、子どもたちになにげなく使っていることを言語心理から分けてみました。



### ○ ミラリング

(子どもの行動をそのまままねる)

【例】子どもがパチパチ拍手をしたとき、大人も同じように拍手をして見せる。

### ○ モニタリング

(子どもの音声やことばをそのまままねる)

【例】子どもが指をさして「アー」と発声したとき、大人も同じように指をさして(ミラリング)「アー」と発声する。

【例】子どもが犬を見て「わんわん」と言ったとき、大人も「わんわん」と言う。

### ○ リフパラレル・トーク

(子どもの行動や気持ちなどを言語化する)

【例】子どもが黙って車を走らせているとき、大人が「ポーポー」と言葉を添える。

### ○ セルフ・トーク

(大人自身の行動や気持ちなどを言語化する)

【例】大人が車を走らせながら、「先生もブーブー、はしるよ」と言葉を添える

### ○ レクティング

(子どもの発音、意味、文法、使い方等様々な言葉の言い誤りに対し正しく言い直して返す)

【例】子どもの「(ヒ) コーキ」に対し、「違うよ」と否定せず「飛行機だね」と返す。

### ○ エキスパンション

(子どもの言った言葉を意味的あるいは、文法的に広げて返す)

【例】子どもがぬいぐるみを抱いて「わんわん」と言った言葉に対し、「わんわん、だっこ(した)ね」と返す。

【【例】子どもがぬいぐるみを抱いて「わんわん」と言った言葉に対し、「わんわん、だっこ(した)ね」と返す。

### ○ モデリング

(子どもの話題に沿いながら、子どもの使うべき行動や新しい言葉のモデルを示す)

【例】子どもが「バスだ」に対して「〇〇駅行きだね」と言葉を掛ける。

## Ⅳ コミュニケーションの原則

インリアルでは、子どものコミュニケーションがうまく進むために、グライス(Grice,H,P)の「会話の公理」から次の原則を設けています。

### コミュニケーションの原則

- ①子どもの発達レベルに合わせる
- ②会話や遊びの主導権を子どもに持たせる。
- ③相手が始められるよう待ち時間をとる。
- ④子どものリズムに合わせる
- ⑤ターン・ターキング(やりとり)を行う
- ⑥会話や遊びを共有し、コミュニケーションを楽しむ

コミュニケーションは、キャッチボールに例えられます。

コミュニケーションは、相互のやり取りで、どちらか一方的に行うものではありません。子どもにわかることばで投げたつもりかもしれませんが、でも、ちょっと見直してみてください。早口であったり、子どもの理解をこえていたりしていませんか？子どもがわかるように表現を工夫したり、子どもの話をよく聞き、やり取りの順番を守りながら、ストーリーをもって話題を逸らさずに話しかけてみましょう。

学校生活、家庭生活など、会話を楽しむことがコミュニケーション力を高めることとなります。特に重度・重複障害のある子どもたちにとっては、伝える手段が少なく、自分の思いが理解されないことが多くあります。

また、自閉症の子どもたちでも、コミュニケーションのキャッチボールができるようになるとパニックが少なくなることが知られています。

子どもの立場になって、もう一度、コミュニケーションについて、みなさん、考えてください！！

【引用・参考文献】

竹田契一ほか編著(1994)

『インリアル・アプローチ』日本文化科学社